文化活動によるまちづくり
―いいだ人形劇フェスタへの市民の観劇参加を中心に―

松　崎　行　代*

長野県飯田市は、人形劇によるまちづくりに取り組んできた。その中核を占めるのは、市民による文化活動「いいだ人形劇フェスタ（以下、人形劇フェスタと記す。）」である。

本研究は、人形劇フェスタが、市民に広く浸透し35年間に渡り継続開催されている要因を、市民の観劇参加の側面から考察した。研究にあたっては、市内全幼稚園・保育園の全保護者を対象に、人形劇フェスタへの観劇参加に関するアンケート調査を実施し分析した。

その結果、就学前または小学生の子どもを持つ保護者であることが市民の観劇参加を促進させる最大の要因であることが考察できた。そしてその背景には、子どもの通う幼稚園や保育園の保育内容に人形劇が取り入れられていることや、保護者に対し人形劇フェスタの情報を提供しているという園の実態があり、保護者の人形劇フェスタへの参加に影響を与えていることが考察できた。また、保護者は、人形劇フェスタへの観劇参加をきっかけに自治会活動や公民館活動など地域社会の活動に関心や参加意欲を持つ人が多く、人形劇フェスタがまちづくりに役立っていることが考察できた。

キーワード：文化活動、まちづくり、いいだ人形劇フェスタ、幼稚園・保育園

＊　京都女子大学大学院　現代社会研究科
公共圏創成専攻　博士後期課程

はじめに

長野県飯田市は、長野県南部に位置する人口104,000人の市である（飯田市, 2015年10月）。古くは秋葉街道、伊那街道、遠州街道など東西を結ぶ交通の要所であり、人形芝居や歌舞伎、花火など、他所からさまざまな芸能が伝播された。この地域の人々は新しい文化に関心を持ち、それらを積極的に受け入れて自分たちが演じて楽しむ気質を持っていた。江戸時代に大阪から伝わった人形浄瑠璃は、集落の住民によって演じられるようになり、天竜川沿いに29もの人形座が生まれた。現在もその内の４座が継承され、飯田市には今田人形座と黒田人形座の２座が、300年の歴史を重ね活動している。このような文化的土壌のうえに、飯田市は、30年近くにわたり人形劇を中軸とした文化活動によるまちづくりを進めてきた（松崎，2011）。その中核を占め、市のシンボル的存在となっているのがいいだ人形劇フェスタ（以下、人形劇フェスタと記す[1]。）である。

人形劇フェスタは、1970年代の「文化の時代、地方の時代」が提唱されるなか、当時の市長松澤太郎氏が市民参加の文化イベントによるまちづくりを目指し、1979年に「人形劇カーニバル飯田」として開始された。当時の飯田市は、地区[2]ごとの強固なまとまりは形成されていたものの、地区を超えた全市的な一体感は見られず、まちづくりの課題となっていた。こうした実状を背景に、各地区で活発に取り組まれていた公民館を活用することで市内全域に上演会場を分散させて設置し、多くの市民が運営や観劇に参加できるよう地区分散公演という飯田ならではの開催方法が考案された。また、実行委員会は、市民と劇人委員会[3]と行政の三者により組織された。このように、当初は行政が主導するかたちで開始された人形劇カーニバル飯田は、徐々に市民の理解を得て規模を拡大していった。第１回目は公演会場17会場、上演作品44作品、参加劇団60劇団、参加証ワッペン売上4,150枚であったが、第５回は上演会場34会場、上演作品140作品、参加劇団114劇団、参加証ワッペン売上7,202枚。そして、第10回には、世界人形劇フェスティバルを同時開催し、上演会場107会場、上演作品数288作品、参加劇団330劇団、参加証ワッペン売上27,008枚となった（いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会，2009：260）。その後も規模は拡大され、国内最大の人形劇の祭典として飯田市に定着していった。

こうした順調な発展を遂げた人形劇カーニバル飯田であったが、第20回をもって行政の判断により突然終了宣言が出された。これは、実行委員会を組織する三者の１つ人形劇人委員会が芸術運動としての充実を強く望むようになったことで、人形劇カーニバルにまちづくりの意義を位置づける行政との間の溝が深まったためであった。この突然の終了という事態に、有志市民は継続を願って話し合いを重ね、１年の空白も無く翌年には、人形劇カーニバル飯田はいいだ人形劇フェスタとして新たなスタートを切った。

人形劇フェスタの理念は、「みる　演じる

ささえる　わたしがつくるトライアングルステージ」に表されている。これは、「市民や人形劇団など誰もが自分の意見や企画を提案でき、その提案が賛同を得られれば、皆でそれが実行できるよう支援する」というもので、みる人、演じる人、この祭典をささえる全ての人が、誰に強制されることなく主体的にかかわっていこうとするものである。ここにあがる３つの活動については、「演じる」という文化創造活動だけでなく、「みる」行為においても内面的な創造活動であり、また、「ささえる」運営の活動も祭典自体をつくり出す創造活動であるとして、三者に共通するものを「創造活動」として捉えている（いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会, 2009：87－88）。

人形劇フェスタの運営組織は、通称「本部実行委員会」といわれる祭典全体を統括するいいだ人形劇フェスタ実行委員会と、市内全域で開催される地区公演ごとに設置される約75の「地区公演実行委員会」の二層構造をとり、両者は連携を取りながら活動を展開している。本部実行委員会は、市民の有志によって構成され、実行委員長もこの中から選出される。現在約80名が参加し、人形劇フェスタの骨子を企画する「プランニングスタッフ」として年間を通して活動に従事している。これに、開催期間のみ業務にあたる中高生・社会人等の「サポートスタッフ」400人ほどが加わる。本部実行委員会が管轄する人形劇公演は、市街地にある飯田文化会館や飯田人形劇場などを会場とした本部企画公演を主とし、海外劇団の公演や有料公演を通してより質の高い人形劇の紹介と人形劇文化の普及をねらったものが多い。一方、地区実行委員会は、地区公演の実施を決めた地区公民館や分館ごと、公民館委員を中心に保育園及び小学校のＰＴＡや婦人会によって組織される。地区公演は、市民が居住する地区で人形劇を楽しむ機会を提供し、市民が人形劇に出会ったり、市民同士または上演した劇団員などさまざまな人との出会いを楽しむ場の創造を主たるねらいとしている。

以上のようにして、人形劇フェスタは、市内全域に130の上演会場が設営され、４日間の開催期間中350劇団が450ステージの上演が行われる。この運営に携わるのは約2,500人の市民ボランティアである。また、累計46,000人（大人27,000人、子ども19,000人）（いいだ人形劇フェスタ10周年記念誌編集委員会, 2009：261）の観客の多くは、子どもおよびその保護者を中心とした市民が占めている。つまり、国内最大といわれる人形劇の祭典人形劇フェスタは、市民がつくる市民のための文化活動といえる。

これまでのまちづくりは、自然や街並み、特産品や芸術など地域の価値を再発見し、新たな産業の創造や観光客によるまちの賑わいをねらうものが多かったが、松澤市長が目指した人形劇を中軸とした市民文化活動によるまちづくりは、住民間のコミュニケーションの活性化を目的としたものだった。松澤市長は、市内の全ての地区で人形劇のお祭りを開催することにより、地区の地域活動として住

民が積極的に参加し協働的な活動が展開されるとともに、市民としての意識の結束や飯田市へのアイデンティティの形成をねらったのである。これが飯田市のめざす「人形劇のまちづくり」であり、人形劇フェスタはその中核となった（松崎，2012：82－89）。

現在、少子高齢化、人口減少、財政制約による国の地方への関与の減少が進み、行政だけに頼らない、市民が自らの地域に関心を持って地域の活動に主体的に参加するまちづくりへの取り組みが求められている。こうした社会的背景に鑑み、筆者は、飯田市にみられる市民の文化活動によって形成される行政と市民の協働的な関係の構築を目指したまちづくりに着目した。そして、飯田市の人形劇フェスタを事例として採り上げ、35年以上にわたる継続開催、2,500人におよぶ市民のボランティアへの参加、46,000人におよぶ観客の多くを占める市民の観劇参加を可能にしたメカニズムを分析・解明することを通し、文化活動によるまちづくりについて考察し、今後のまちづくりモデルの構築を目指したいと考え研究に取り組んでいる。

そこで、人形劇フェスタが市民文化活動として市民に広く浸透し、35年間にわたり継続開催されている要因について、次の点からの分析が必要であると考えた。

まず１点目は、人形劇フェスタが当初行政主導で始まり、文化政策として市が掲げる「人形劇のまちづくり」の中核として位置づいている点から、飯田市の文化政策の変遷と人形劇フェスタの関係についての分析である。これに関しては、「飯田市における文化行政とまちづくりの変遷―人形劇フェスタを中心に―」（松崎，2012）に既にまとめた。ここでは、行政主導で始めた人形劇フェスタが、模索しながら、次第に市民が主体となり行政がそれを支える協働の形に至る過程が整理できた。

２点目は、全市域的に広がる広域開催とそれに伴う2,500人におよぶ運営に携わる市民ボランティアの参加を成功させた要因についての分析である。これに関しては、「公民館活動によるまちづくり―飯田市公民館システムと人形劇フェスタを事例に―」（松崎，2014）に既にまとめた。人形劇フェスタは、「市公民館―地区公民館―分館」の三層構造の公民館システムを活用することにより全市域的な広がりを持たせ、多くの市民の参加を実現させた。ただし、25,00人の市民参加を35年にわたり継続的に実現させている点に着目すると、飯田市の公民館システムを支える地域基盤がすでにありそこに公民館システムをあてはめたことが、見逃してはならない重要な点として指摘できた。つまり、単に公民館システムが形成されているだけでは市民の文化活動への参加の推進と継続的な取り組みは難しく、公民館システムが機能する地域基盤が形成されていることが重要だといえる。上述したように、飯田市に現在ある20の地区は、合併前の旧町村がそのまま地区となり、そこに地区公民館が設置されている[4)]。そして、地区内にある複数の区は藩政村の集落であり、多くの地区では区ごとに分館が設置されてい

る[5]。区は現在もかつての集落の持っていた地域社会の機能をもち、分館は区の自治活動と区別されずに地域住民によって運営されている。このように地域社会の基盤があるところに公民館活動が展開されたことで、住民による公民館活動が活発に展開されたのである。そして、人形劇フェスタは、この公民館システムを活用したことで、より多くの市民の継続的な活動への参加を可能にしたといえる。さらにもう１点、公民館システムが機能することに関して重要なことは、地区公民館に配置された行政職員である主事の存在である。各地区で自主的に取り組まれる人形劇フェスタ地区公演は、主事の社会教育的な視点からの支援を受けることで、市民の主体性が尊重される市民活動としての発展を実現させたといえる。

３点目は、人形劇フェスタへの市民の観劇参加を実現させた要因である。人形劇フェスタが35年にわたり継続開催されてきたことを考える際、運営への市民ボランティアの参加だけでなく、観劇を楽しむ市民の参加があったことが重要な切り口となる。芸術活動は観客の存在があって成立するものであり、人形劇フェスタも上演する人形劇団や運営スタッフ、会場が確保されるだけでは成り立たない。つまり、人形劇フェスタが35年にわたり継続開催されるなかで市民文化活動として浸透し、飯田市のまちづくりのシンボルとして定着した要因には、人形劇を観劇するという文化活動が市民のなかに継承されたことがあげられる。

本稿では、運営側よりもはるかに参加人数の多い市民の観劇参加に焦点を当て、人形劇フェスタの市民参加の実態を明らかにすることを目的としている。筆者はかつて20年にわたり実行委員として人形劇フェスタにかかわっていたが、そのなかで、例年、小学生以下の子どもを中心とした親子連れの市民の観客が多いことが推察できた。本研究では、市民へのアンケート調査によりその実態を把握するとともに、親子を中心とした観劇参加を促進させる要因について分析し、35年にわたり45,000人を超える観劇参加を継続させる人形劇フェスタ成功の要因を明らかにし、文化活動によるまちづくりへの考察を深めたい。

市町村の広域合併が実施され、市民に対する新しい地域アイデンティティの構築を課題とする地方都市が多い現状において、人形劇フェスタの市民参加の実態を分析し考察することは、今後必要とされる市民参加のまちづくりについて考える重要な手掛りを与えてくれると考える。

Ⅰ　市民参加のまちづくりに関する先行研究

田村明は、まちづくりとは、市民が直接的に関わり主体性をもって自分たちの住む町をより人間的な生活の基盤に変えようという活動であると述べている（田村，1999：120）。まちづくりに関する先行研究には、主体的な住民参加といった点で共通点を持つ社会教育学の領域からの研究が多い。しかし、池浦順子や岡大輔などの研究に代表されるように、そのほとんどが実践報告のレベルにとどまっ

ている（池浦，2003；岡，2005）。そのなかで文化活動とまちづくりとの関係性に視点を置いた研究として、小林平造と原義彦を挙げることができる。小林は、まちづくり[6]を進める社会教育が十分な展開を成し得ていない状況をあげ、その要因を社会教育の学習内容とまちづくりの課題の結合に問題があると指摘している（小林，1996：235－250）。また原は、まちづくりへのより積極的な公民館の活用とそのための生涯学習推進員の配置を提案している（原，2002：４－８）が、いずれも公民館活動の枠組みの中での議論である点は変わらない。

一方、公共政策学の領域では、根木昭は、1996年度から文化庁が開始した「文化のまちづくり事業」により、地域に根ざした文化芸術の創造とすぐれた芸術文化の鑑賞の活動が目指されるなか、市民参加を促進するための公共文化施設のソフトウェア充実の重要性を説いている（根木，2001）。また、市原正隆は、恵那市山岡町が広域合併後に取り組んだ日本初の町内全世帯加入のNPO法人山岡を採り上げ、まちづくりに向けた地域協議会との地域分権について現状を分析している（市原，2007：67－82）。

長年続く大規模な文化活動としては湯布院映画祭や松本市のサイトウキネンフェスティバルが有名であるが、残念ながらこれらのイベントをまちづくりの観点から検討した研究は見当たらない。ただ、湯布院町のまちづくりに関しては、岩淵泰が環境問題に対する住民の対立の解決に向けたまちづくり運動を運動論の立場から分析している（岩淵，2007：55－76）。

また、近年、各地で取り組まれている滞在型の芸術創造活動をまちづくりに活用するアートプロジェクトとして、中島正博は瀬戸内国際芸術祭、千代苑子は鳥取市鹿野町の鳥の劇場をとりあげ、開催地の地域社会との関係を論じている（中島，2012：71－89；千代，2013：155－171）。しかし、中島らがとりあげる文化活動はいずれも外発性の地域文化活動であり、地域外からの短期居住者によって持ち込まれた文化活動が地域にどのような影響を与えたかを考察の視点としている。本稿で扱う人形劇フェスタが、市民が観客として楽しむために市民が運営するという内発的な市民主体の文化活動である点で大きな違いがある。市民が運営する文化イベントによるまちづくりでは、田代利惠の研究がある。田代は、大分県臼杵市のうすき竹宵、岐阜県美濃市の美濃和紙あかりアート展、岡山県真庭市勝山のお雛まつりの３つの事例より、市民の協働的なまちづくりへの取組みの発展要因を考察している（田代，2012：149－168）。しかし、本稿とひとづくりの点では共通するものの、市民参加の実態が客観的に示されておらず、また、市民参加の形態も商工会議所、商店街青年部、青年会議所、行政などの団体を通した参加であり、市民参加の実態や動機について明らかとされていない。

また、津久井寛は、住民の生活実態や商店街への意識に関する調査を通し、商店街を中心とした地域コミュニティ活性化への取り組

みを考察している（津久井, 2012：31－42）が、商店街というまちの一部の活性化をねらったまちづくりであり、市民調査という点では共通するものの本稿の全市域的広がりをもつ文化活動によるまちづくりとは異なる。

本研究で取り上げた人形劇フェスタは、市内全域に広がりを持つ市民が運営面また観劇面から参加しつくりあげる市民文化活動であり、その内容自体が特別である。そのため、同様の市民文化活動における市民参加について分析した先行研究はない。特に、本論で考察する運営側以外の「観客」としての参加に着目した研究はない。

Ⅱ　市民の観劇参加に関する調査

１）調査概要

市民の人形劇フェスタへの観客としての参加の実態および参加を促進する要因を検証するため、アンケート調査を実施した。調査対象は、市内の全幼稚園・保育所に在園する全園児の保護者（世帯数）とした。

調査対象者の選定にあたっては、以下の３点を理由とした。１点は、筆者が20年近く人形劇フェスタにかかわるなかで、累計45,000人におよぶ観客の多くは、市民の親子連れと市外・県外からのプロ・アマチュア人形劇団員の成人で占められ、かつ、市民の観客の大半を占める親子連れの子どもは幼児が多くを占めていると推察できる。２点目は、調査を実施した2014年３月時点における飯田市の幼稚園・保育園の在園児数3,662人、世帯数3,083世帯、就園率３歳以上94.5％、３歳未満の乳児保育が30.5％（飯田市保健福祉部, 2014）であることより、市内の就学前の乳幼児全体の３歳未満は約30％であるが、本調査が３歳以上の約95％を対象とした調査となるため、調査対象は就学前の子どもを持つ保護者全てを対象としているといえること。３点目は、人形劇フェスタが35年にわたり継続開催されていることから考え、現在、幼稚園・保育園に在園する子どもを持つ保護者の多くが、自身の幼児期または生まれた時にはすでに人形劇フェスタが開催されていたと推測でき、彼らの成育歴にそった人形劇フェスタへの観劇参加経験の結果から、年代別の人形劇フェスタへの観劇参加の様相が推測できると考えられること。以上の理由により、飯田市民の全数調査ではないが、人形劇フェスタへの市民の観劇参加の実態について把握できると考えた。

また、保護者調査に合わせて、飯田市内の全幼稚園・保育園の園長を対象に、園の保育内容への人形劇活動の導入、人形劇の理解、人形劇フェスタの理解、保護者への人形劇フェスタ等の情報提供の実施についての調査を実施した。本稿では、目的に照らして保護者調査を中心に分析するが、園長調査についても結果の一部を用いる。

２）保護者調査について

①実施期間：2014年３月。

②調査対象：飯田市内全幼稚園（６園：私立５園、内４園は認定こども園。公立１園。）・保育園（35園：私立17園。公立18園。）合

計41園の全保護者（１世帯１人）3,083世帯。

③調査実施方法：飯田市保健福祉部子育て支援課を通して各園に対し調査協力を依頼した。調査用紙の配布は、保護者数（世帯数）分の調査用紙を梱包したものを子育て支援課より各園に配布。園が各保護者に調査用紙を配布した。回収は、保護者が回答調査用紙を完封して園に提出したものを、園がまとめて子育て支援課に持参してもらい、回収した。

④回収数（回収率）：配布数3,083枚、回収2,028枚。（66.8％）

有効回答数：2,010枚。無効回答数：18枚。

⑤調査内容：現在の人形劇鑑賞の実態と意識。成育過程（就学前期・小学生期・中学生期・高校生期・高校卒業後・現在）の人形劇フェスタへの参加経験。公民館および自治会への意識と参加。回答者の属性。

⑥回答者の属性

・性別：男性 5.9％（119人） 女性 93.4％（1,877人） NA 0.7％（14人）

女性が約95％と、回答者の多くが女性であった。

・年齢：95％の人が45歳未満であり、生まれたときにはすでに飯田市で人形劇フェスタが開催されていた年齢の人が40％、また０歳から９歳（小学校低学年）のときに人形劇フェスタが開始されたという人が55％であった。つまり、回答者らは、子どものころ飯田市およびその近郊に居住していた場合、人形劇フェスタへの参加が可能であった人たちといえる（表１参照）。

３）園長調査について

①実施期間：2014年３月。

②調査対象：飯田市内全幼稚園（６園：私立

表１　年齢別回答者数　単位：％（人）　N=2010

現在の年齢		人形劇フェスタ開始当時の年齢
19歳以下	0.0（　1）	39.7％　０歳
20～24歳	1.2（ 24）	
25～29歳	9.5（191）	
30～34歳	29.0（583）	
35～39歳	36.9（723）	０～４歳
40～44歳	19.2（385）	５～９歳
45～49歳	4.0（ 81）	10～14歳
50～54歳	0.3（　7）	15～19歳
55歳以上	0.3（　7）	20歳以上
NA	0.4（　8）	

５園、内４園は認定こども園。公立１園。）・保育園（35園：私立17園。公立18園。）合計41園の園長またはこれに代わる人。

③調査実施方法：飯田市保健福祉部子育て支援課を通して各園に対し調査協力を依頼。調査用紙は、子育て支援課より各園に配布。回収は、各園が調査回答用紙を完封したものを子育て支援課に持参してもらい、回収した。

④回収数（回収率）：配布数41、回収24園。(58.5％)
有効回答数：24枚。無効回答数：０。

⑤調査内容：人形劇観劇および人形劇を演じる活動の教育課程・保育課程への組み入れと活動の実態。人形劇への理解。人形劇フェスタに関する保護者への情報提供。

Ⅲ　市民の観劇参加の実態

１）人形劇フェスタへの市民の観劇参加の実態

表１に示したように、回答者の95％の人が45歳未満であり、人形劇フェスタが1979年から35年間継続開催されていることから考えると、回答者のほとんどが、生まれた時からあるいは小学生のころに人形劇フェスタが開催されていたこととなる。こうした実態を前提に、成育歴を６つの期に区分して、各期の居住地と人形劇フェスタへの参加状況を調査した。そして、その結果より市民の年齢層による人形劇フェスタへの参加実態を推察した。成育歴の６つの期は、就学前期、小学生期、中学生期、高校生期、大学等進学や就職などした高校卒業後、保護者となった現在である。結果は、表２のとおりである。

表２　就学前期から現在までの居住地別人形劇フェスタへの参加　単位：％（人）

		フェスタに参加した	フェスタに参加しない	居住者数
就学前期	飯田市内居住	63.3(542)	36.7(314)	N＝ 856
N＝1555	飯田市外居住	7.4(52)	92.6(647)	N＝ 699
小学生期	飯田市内居住	72.8(712)	27.2(266)	N＝ 978
N＝1705	飯田市外居住	10.1(71)	89.9(630)	N＝ 701
中学生期	飯田市内居住	13.3(146)	86.7(954)	N＝1100
N＝1776	飯田市外居住	1.5(10)	98.5(666)	N＝ 676
高校生期	飯田市内居住	3.6(43)	96.5(1145)	N＝1188
N＝1870	飯田市外居住	1.6(11)	98.4(671)	N＝ 682
高校卒業後	飯田市内居住	19.4(167)	80.6(694)	N＝ 861
N＝1907	飯田市外居住	4.0(42)	96.0(1004)	N＝1046
現在：保護者	飯田市内居住	49.4(948)	50.6(971)	N＝1919
N＝1983	飯田市外居住	23.4(15)	76.6(49)	N＝ 64

当然ながら、飯田市外居住者の参加は少ない。飯田市内居住者の人形劇フェスタへの参加では、就学前期は60％、小学生期は70％と参加率が高いが、中学生期は10％とかなり少ない、そして高校生期は５％未満とさらに少ない参加となる。その後、高校卒業後は20％、そして、保護者である現在は50％と就学前に継ぐ割合の高さとなっている。

各期の参加者の参加形態は、どの年齢層においても、観劇参加が最も多く、80％以上がほとんどである（表３参照）。

以上の結果より推察すると、人形劇フェスタの観劇参加は、就学前と小学生期の子ども、そして、その保護者が多くを占めているといえる。

人形劇フェスタ自体への参加が減少する中学生期・高校生期・高校卒業後は、運営のボランティアへの参加が他の期に比べ高い割合となる。中学生から参加が可能となるサポートスタッフに参加した人が、高校生以降も引き続き参加していると考えられる。

２）市民の観劇参加を促進する要因

①過去の参加経験との関係

Ⅲ１）の結果より、就学前・小学生期には60～70％であった人形劇フェスタへの参加率が、高校生期には５％を下回るものの、保護者になった現在は50％と高くなっている。では、中学・高校生期と一旦人形劇フェスタから離れていった市民が、成人し保護者となって再度人形劇フェスタに参加するようになる要因は何であろうか。

35年間継続開催されているという飯田市の文化的環境のなかで、観劇参加者率の高い就学前期および小学生期の人形劇フェスタへの参加経験が、保護者となった現在の人形劇フェスタへの参加に影響しているかをクロス集計によって分析した。結果は、表４のとおりである。

就学前期・小学生期に人形劇フェスタに参加していた人の方が参加していなかった人よりも、保護者となった現在の人形劇フェスタへの参加割合はわずかに高いが、およそ50％で明確な差があるとはいえない。つまり、就学前・小学生期の人形劇フェスタへの参加は、

表３　就学前から現在までの人形劇フェスタへの参加形態　単位：％（人）

	観　劇	上　演	運営ボランティア	その他	参加者実数
就学前期	97.3(579)	3.0(18)	—	1.3(8)	N＝595
小学生期	97.3(765)	57.2(45)	—	0.5(4)	N＝786
中学生期	82.1(128)	19.2(30)	8.3(13)	1.9(3)	N＝156
高校生期	64.8(35)	9.3(5)	29.6(16)	3.7(2)	N＝ 54
高校卒業後	79.1(167)	8.1(17)	20.9(44)	9.0(19)	N＝211
現在：保護者	95.2(920)	0.4(4)	8.0(77)	2.3(22)	N＝966

表４　就学前期・小学生期の人形劇フェスタへの参加・不参加別現在の人形劇フェスタへの参加

単位：％（人）

		現在		
		人形劇フェスタに参加した	参加しない	
就学前期	人形劇フェスタに参加した	54.4(323)	45.5(270)	N＝593
	参加しない	46.9(448)	53.1(508)	N＝956
小学生期	人形劇フェスタに参加した	52.6(412)	47.4(372)	N＝784
	参加しない	47.3(433)	52.7(482)	N＝915

表５　大人のみの観劇について

単位：％（人）　N＝2010

実際に行くことがある	4.3(91)
行ってもいいと思うが行ったことはない	49.3(989)
そのように思える人形劇が無い	4.0(81)
行かない	38.6(774)
その他	0.3(7)

保護者となった現在の人形劇フェスタへの参加に影響していないといえる。

②保護者として子どもに人形劇を劇せたいという思い

・子ども同伴の観劇

本調査では、現在（調査実施年度の人形劇フェスタ2013）の観劇参加が子ども同伴であったかは質問していないが、大人のみ（１人または複数で）での人形劇観劇に対する意向に関する質問への回答は表５のとおりであった。「行ってもいいと思うが行ったことはない」「行かない」が合わせて90％近くとなり、保護者のほとんどは、人形劇の観劇は子ども同伴で行くと考えていた。この結果からは、保護者となった現在の観劇参加者の多くは、当然、子ども同伴で観劇していたと考えられる。

・子どもへの人形劇観劇の推奨

子どもの人形劇観劇の推奨については、表６のように、およそ80％の人が、子どもに人形劇を観せたいと考えていた。

その理由については、表７のとおりである（複数回答）。子どもを中心に考えている「子どもが喜ぶ」87.3％、「子どものためになる」

表６　子どもの人形劇観劇の推奨

単位％（人）　N＝2010

考える	79.0（1588）
考えない	14.1（ 283）
その他	6.7（ 135）
ＮＡ	0.02(4)

表７　子どもに人形劇を観劇させたい理由（複数回答）

N=1588　単位：人、（％）

子どもが喜ぶ	1386(87.1)
子どものためになる	981(61.7)
自分が楽しい	545(34.3)
安価である	118(7.4)
その他(飯田の文化だから。親子ともに楽しめる。)	44(5.3)
時間がつぶせる	80(5.0)

61.8％が、「自分が楽しい」34.3％を大きく上回った。保護者の多くは第一に子どものためを考え、子どもの人形劇観劇を推奨していると考えられる。

③保護者であるという要因

以上より、約半数の保護者が人形劇フェスタに観劇参加しているが、それは、自身の幼児期や児童期の過去の人形劇フェスタへの参加経験や、自身が人形劇が好きだからという人形劇理解に基づいた要因からではなく、何よりも保護者となったことが大きな要因であり、わが子に人形劇を観せたいと考えるからだと言える。

つまり、市民の人形劇フェスタへの観劇参加を促進させる要因は、保護者であることであり、保護者が子どもを同伴して人形劇フェスタに観劇参加することで、就学前・小学生期を中心とした子どもの観劇参加とその保護者層の参加割合が高くなるといえる。

３）保護者の人形劇フェスタへの参加を促進する幼稚園・保育園の役割

このような保護者の考えや行動に影響を与えているのが、幼稚園・保育園であると考えられる。保護者へのアンケートと同時に実施した園長対象の幼稚園・保育園での人形劇活動に関する実態調査から、以下の３点が明らかとなった。

１点目は、幼稚園・保育園で人形劇観劇を教育課程・保育課程に組み入れている園は、回答のあった24園中18園で75.0％であった。

２点目は、子どもたちが人形劇を演じて遊ぶ活動を教育課程・保育課程に組み入れている園は、回答のあった24園中15園で62.5％であった。

３点目は、保護者に対して人形劇フェスタに関する情報提供や参加証ワッペンの購入を勧めている園は、回答のあった24園中24園の100％であった。

このように、乳幼児の通園する幼稚園・保育園では、人形劇のまち飯田の地域資源として人形劇を積極的に教育・保育活動に組み入れ、あわせて、保護者に対しても地域の文化

活動を積極的に紹介し、参加を促進させる活動を実施していた。こうした園の働きかけが保護者の人形劇への関心を拡げ、子どもにとっての人形劇の教育的価値を考えるきっかけになっていると考えられる。あわせて、参加証ワッペンの購入についてなど人形劇フェスタへの参加を促進させる具体的な働きかけにより、保護者の人形劇フェスタへの参加が実現されたと考えられる。こうした点からは、幼稚園・保育園は、人形劇フェスタの成功そして人形劇のまちづくりに貢献し、次代を担う人材の育成や地域の文化活動の継承に大きな役割を果たしているといえる。

4）観劇参加という文化活動が継承された要因

保護者として人形劇フェスタに参加した人と参加していない人の、公民館活動や自治会活動等地域および地域活動への関心や参加の実態は、表８～11のとおりである。

公民館活動への関心および活動への参加と自治会活動への関心および活動への参加とも、人形劇フェスタに参加している人の方が関心を持ち積極的に参加する人が多い。居住する地区で人形劇フェスタの地区公演が開催され参加することが、地域の活動や地域の人を知る機会になったと推測できる。

今回の保護者調査の回答者は、男性が回答者全体（N=2010）の5.9%（119人）、女性が93.4%（1876人）、無回答が0.7%（14人）と、ほとんどが女性であり、多くは母親と考えられる。女性の地域活動への参加は男性に比べて少なく、保護者、特に母親は、地域の活動への参加に対し消極的である[7]。しかしながら、人形劇フェスタのような子ども同伴で参加できる文化活動が地域で実施されることで、母親たちは地域の活動に参加する機会を得るのである。母親たちは、人形劇フェスタへの参加経験を通し、地域の公民館活動や自治会活動に対しての関心を広げ、活動への参加に対しても積極的な気持ちを持つのである。

表８　人形劇フェスタへの参加・不参加別公民館活動への関心　単位：%（人）

		公民館活動への関心				
		とてもある	まあまあある	あまり無い	全く無い	N
今年の人形劇フェスタ	参加した	6.2(59)	52.9(508)	35.6(342)	5.3(51)	N＝ 960
	参加しない	2.4(25)	37.0(379)	46.9(480)	13.7(140)	N＝1024

表９　人形劇フェスタへの参加・不参加別公民館活動への参加　単位：&（人）

		公民館活動への参加				
		とても積極的	まあまあ積極的	やや消極的	全く消極的	N
今年の人形劇フェスタ	参加した	2.9(28)	36.0(345)	38.9(373)	22.2(213)	N＝ 959
	参加しない	1.6(16)	20.4(209)	37.4(383)	20.6(416)	N＝1024

表10　人形劇フェスタへの参加・不参加別自治会への意識　単位：%（人）

		自治会への意識				
		とてもある	まあまあある	あまり無い	全く無い	N
今年の人形劇フェスタ	参加した	3.5(33)	47.9(458)	38.1(365)	10.6(101)	N＝ 957
	参加しない	0.9(9)	20.6(312)	47.1(481)	21.4(219)	N＝1021

表11　人形劇フェスタへの参加・不参加別自治会活動への参加　単位：%（人）

		自治会活動への参加				
		とても積極的	まあまあ積極的	やや消極的	全く消極的	N
今年の人形劇フェスタ	参加した	3.3(32)	36.2(347)	38.8(372)	21.7(208)	N＝ 959
	参加しない	0.6(6)	22.3(227)	36.1(368)	41.1(419)	N＝1020

子どもを持ち保護者となったことが人形劇フェスタへの参加を促進する大きな要因と考えられるが、さらに、この観劇参加の経験が保護者を人形劇フェスタ地区公演の運営への前向きな参加に向かわせることも考えられる。このように観劇参加から運営への参加へと形態を変えて人形劇フェスタへの市民の参加が継続されることで、人形劇フェスタは35年間にわたる継続開催が可能になったとも考えられる。

Ⅴ　結　論

調査より、市民文化活動である人形劇フェスタへの市民の観劇参加の実態が把握できた。市民は、保護者になることで、子どもを同伴し積極的に人形劇フェスタに参加するといえる。35年間、継続開催されている歴史的事実からは、幼少期の人形劇フェスタへの参加経験が飯田市や人形劇フェスタへの愛着を育み、それが成人になってからの人形劇フェスタへの参加に影響を与えているのではないかとの推測があったが、調査結果からはそういった考察は得られなかった。市民（保護者）は、子どもが人形劇を喜んで観ると考え、人形劇を子どもに観せたいと強く思い、自分一人では観にいくことを考えない人形劇フェスタに子どもを連れて参加するのである。こうした保護者と子どもの存在によって、人形劇フェスタは、累計45,000人もの観客を毎年数え、35年間継続的に開催されて来た。そして、保護者らの人形劇への理解を深め人形劇フェスタへの関心を広げた背景には、飯田市内の幼稚園や保育園の存在が大きく影響していた。幼稚園や保育園が保育内容に人形劇を積極的に取り入れることで、保護者は子どもが人形劇を楽しむことやその教育的意義を理解する。そして、園が人形劇フェスタの情報を提供することで、積極的に人形劇フェスタに参加することが促進されるのである。

飯田市が、人形劇という文化財をまちづく

りの中軸においた要因の一つには、江戸時代に伝播された人形浄瑠璃が300年を経た今も継承されているという文化的土壌の存在があった。しかし、それだけでは人形劇フェスタが市民文化活動として市民に広く浸透し、35年にわたり継続開催されることは難しかったといえる。運営面への市民参加においては、飯田市の公民館システムを活用することで、人形劇フェスタを地区の活動として市民が受け入れ積極的に参加することが実現された。そして、観劇面への市民参加においては、人形劇という芸術性だけでなく教育性を持つ文化財を中核にしたことで、保護者と子どもを中心とする市民の参加が広く得られたのである。人形劇が子どもにふさわしい文化財であるという教育的価値は誰もが認め、市民は保護者になったことで、ごく当然のこととして子どもを同伴し人形劇フェスタに参加する。つまり、飯田市に在住し、飯田市に人形劇フェスタがあることで、子どもとその親たちは、毎年人形劇フェスタに観劇参加する。そして、毎年、誕生し成長した子どもたちが新たな観劇参加者として人形劇フェスタに参加する。この循環の中で人形劇フェスタは継続されていると考えられる。

ただし、この現状をこのままでよしとすることには問題があり、人形劇フェスタをまちづくりの核としてより積極的に活用していくための思索を考えるべきである。例えば、高校生や高校卒業後の青年たちの人形劇フェスタへの参加が極端に少ないことは、今後の課題として採り上げるべき問題であると考える。次代を担う若い力として期待される若者たちの地域への関心や地域活動への参加の場として、人形劇フェスタが活用できるのではないだろうか。飯田市では、幼稚園や保育園への人形劇観劇の助成事業や、小学校や中学校への人形劇指導に関する事業は積極的に実施しているが、高校生に対してはほとんど行われていない。2014年より、飯田市公民館が実施を始めたフィールド学習が唯一といえる。この年代への積極的な関与が求められる。

また、保護者層においては、調査結果より、人形劇フェスタに参加することにより公民館や自治会等の地域に対する関心を拡げ、活動への参加を前向きに考えるようになることが明らかとなった。こうした実態をまちづくりのシステムに生かすことで、人形劇のまちづくりが市民参加による人形劇フェスタの成功で終わるのではなく、さらに市民の主体的な地域社会の活動への参加を促進し、活発なコミュニケーションが繰り広げられるまちづくりに結びつくと考えられる。ここまで至ったときに、人形劇フェスタは、人形劇を中軸とした飯田市のまちづくりの核としての本来の意義を達成できたことになるといえる。今後は、そうした文化活動によるまちづくりのシステムの構築を目指したい。

註

1）前身の人形劇カーニバルを含め、人形劇フェスタと記す。ただし、人形劇カーニバル飯田といいだ人形劇フェスタを個別に示す際は、それぞれの正式名称で表記する。

2）地区とは、地域自治区のことである。飯田市は、現在20地区で構成されている。

3）人形劇フェスタでは、人形劇団関係者を人形劇人と称する。人形劇人委員会は、アマチュアおよびプロの人形劇団の代表者によって組織され、人形劇団関係者の意向を取りまとめ、人形劇カーニバル飯田の企画および運営に携わった。

4）旧飯田町と旧上飯田町の５地区は、1968年に１館制から５館に分離した。

5）分館を持たない地区は市内に５地区あるが、自治会が公民館分館の役割も担っている現状があきらかとなった（松崎：2014）。

6）小林は「地域づくり」を用いているが、本稿のまちづくりと同義であるのでここではまちづくりと表記した。

7）内閣府平成20年男女共同参画白書によると、女性の地域活動への参加意欲は高いものの、実際、地域の活動やNPOなどで役員にあたる女性は男性に比べ極端に少ない。

参考文献

いいだ人形劇フェスタ30周年記念誌編集委員会，2009『つながってく。～人形たちと歩んだ30年～』いいだ人形劇フェスタ実行委員会

池浦順子，2003「公民館をキーステーションに支え合うまちづくり―ボランティア『オアシス』の実践から―」月刊社会教育47（9）：12－19

市原正孝，2007「まちづくりと地域内分権―特定非営利活動法人まちづくり山岡の実践をとおして―」岐阜医科大学紀要１：67－82

岩淵泰，2007「『生活型観光地』と住民自治―大分県湯布院町の『まちづくり』運動から―」熊本大学社会文化研究５：55－76

岡大輔，2005「まちづくりをコーディネートする公民館―有田校区まちづくりの実践から―」月刊社会教育49（7）：27－33

小林平造，1996「地域づくりの主体形成と青年に関する研究―地域社会教育実践論想像の視点から―」鹿児島大学教育学部研究紀要．教育科学編47：235－250

田代利惠，2012「文化的イベントが地域協働のまちづくりに果たす役割に関する研究―古い町並みを有する地方都市を事例に―」『龍谷大学大学院政策研究』1：149－168

田村明，1999『まちづくりの実践』岩波書店

千代苑子，2013「外発性の文化・芸術活動が地域のまちづくりプロセスに与える影響に関する研究―鳥取市鹿野町・鳥の劇場を事例に―」『龍谷大学大学院政策学研究』2：155－171

津久井寛，2012「住民アンケートによる地域コミュニティ活性化に関する考察」『帯広大谷短期大学紀要』49：31－42

中島正博，2012「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり―アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質―」『広島国際研究』18：71－89

根木昭，2001『日本の文化政策―「文化政策学」の構築にむけて―』勁草書房

原義彦，2002「自治公民館とまちづくりへの課題」『月刊公民館』537：4－8

松崎行代，2011「市民による文化活動成立の文化的要因―飯田市の人形劇フェスを事例に―」『京都女子大学大学院現代社会研究論集』5：63－75

松崎行代，2012「飯田市における文化行政とまちづくり―人形劇フェスタを中心に―」『京都女子大学大学院現代社会研究科論集』6：79－95

松崎行代，2014「公民館活動によるまちづくり―飯田市公民館システムと人形劇フェスタを事例に―」『日本公民館学会年報』11：94－103

参考資料

飯田市健康福祉部作成「飯田市内保育所および幼稚園の月別園児数・世帯数」（2014年１月現在）

参考 URA

飯田市「飯田市の人口」http://www.city.iida.lg.jp/（2015.10.１）

内閣府男女共同参画白書平成20年版 http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h20/gaiyou/html/honpen/b1_s00_01.htm　（2015.９.10）

謝　辞

本研究の調査にあたっては、飯田市健康福祉部および飯田市教育委員会、また、市内の全幼稚園・保育園の園長先生および保護者の方々の多大なご尽力とご厚意によって実施することができました。ここにあらためて感謝の意を表します。

Cultural Activity and Community Development
— A Case of Citizen Spectator Participants in Iida Puppet Festa —

MATSUZAKI Yukiyo

〈Summary〉

Iida city, Nagano prefecture, is a city of puppet show. Many citizens have been contributing to the success of it, holding Iida Puppet Festa as the largest event in the city. The event has been held for 35 years in a roll, involving many citizen participants.

In this study, I analyze the factor of this success from citizen spectator participants.

As result of the investigation to parents of kindergarten and nursery schools, the following was made clear. The first point, the purpose that a citizen spectator participates in Iida Puppet Festa is because they want to show children puppet show. The second point, puppet play is incorporated in the education of the kindergarten and nursery schools, and, the kindergarten and nursery schools tell the information about the puppet play to parents. The third point, parents who participated in Iida puppet Festa come to be interest in community development.

Key words：Cultural Activity, Community Development, Iida Puppet Festival, Kindergarten・Nursery school